



賢いはたらき方のススメ🕒

黒佐 英司さん



新しいライフスタイルが盛んに叫ばれるようになり、働き方の変革期に入った2020年。リモートワークが浸透し、会社以外の場所や自宅で自分の時間軸で仕事をするようになった人も多い。

リモートワーク、フルフレックス制で、「いつ、どこで、どう働くか」は個人の裁量で決めることを実践している、株式会社マツリカ。代表取締役の黒佐英司さんは、「働き方の概念は大きく変わる」と話す。スタートアップ会社が集結している五反田に拠点を構え、会社同士のコミュニケーションを円滑にするために「五反田バレー」を設立した、6社の発起人のひとりでもある黒佐さんに、スタートアップ企業の魅力やこれからのビジネスコミュニケーションの方法、自分らしく働くために必要なことについて、お話を伺った。

人を幸せにする、やりたいことを実現する手段としての起業



—起業を志したきっかけをお聞かせください。

黒佐：「一人でも多くの人を幸せにする」という信念があり、それを実現するための手段の一つが起業でした。起業を考え始めたのは中学生の頃。実は小さい頃から漠然と「人を幸せにしないといけない」という脅迫観念のようなものがありました。

小学生の時には「がんの特効薬を作ろう」とか「どこでもドアみたいなものを開発しよう」と考えていて、中学生になると、個人の力は圧倒的に弱い、一人ではできないのだと理解したのです。同じ思いを共有して、同じ方向に進んでいく仲間と資金が必要だとわかり、起業しようと考えようになりました。

—マツリカを起業するまでの道のりは？

黒佐：最初から「やりたいことしかやらない」というスタイルがあり、新卒でハウスメーカーに就職して営業職に就き、その後、スタートアップのユーザーベースに転職しながらも、ずっとそういったスタイルで働いてきました。マツリカを立ち上げたのも、やりたいことがはっきりあったからです。

賢いはたらき方のススメ ④

—それはどのようなことでしょうか。

黒佐：マツリカのミッションとして掲げているのが「世界を祭り化する」ことです。社名もこのミッションから名付けました。社会人になると、学生時代に経験した体育祭や文化祭のような、自分たちで作り上げていく高揚感を実感する機会が少なくなります。みんなで一丸となって祭りに向けて準備を進めていくときに出すエネルギーは強くて素晴らしい。それは、多くの人を幸せにする。それをビジネスでどうやって実現していくかを理念としています。

社会人が一番時間を費やしているのは仕事をしている時間です。その時間帯を楽しめるように支援していきたいと思っているし、これが現時点で個人としての信念に最も通ずることだと思っています。

信念を持つことが大切。そうすれば、最終判断でも迷いが消える

—マツリカではフルフレックス、リモートワークなど、自由度の高い働き方を実践していますが、黒佐さんの考える理想的な仕事環境とはどのようなものですか。

黒佐：マツリカでは、個人やチームごとに働き方の裁量が任されています。会社に来て働いている人もいれば、リモートワークをしている人も。フルフレックスをいかして、大学に通いながらフルタイムで仕事をしている社員もいます。



これからは働くという概念自体が変わるのではないのでしょうか。例えば、フリーランスという働き方は、数年前まではエンジニアやデザイナーが多かった。ですが、現在は営業やマーケティングなどもフリーランスとして働く人が増えるなど、職種に関係なく広がっています。

北米では、雇用されている人よりも、フリーランスなど個人事業主のほうが多く、割合では6～7割ほどになってきていると言われています。雇用されているほうがマイノリティーなんですね。どこかに勤めて決まった時間に働き、決まった報酬をもらうという形態はどんどん変わっていきます。

理想は、やりたいことをやりたいときにやる。その先に社会に対して価値貢献し、対価として報酬があるという状態ですね。

—そのスタイルを実現するには何が必要だと思われますか。

黒佐：難しいですよ。社会で広く実現するにはまだまだ時間がかかると思います。でも不可能ではないと思います。

人間の欲求は5段階あるといわれています。マズローの法則によれば、生理的欲求、安全の欲求、社会的欲求、承認欲求、そして自己実現の欲求です。生理的欲求、つまり生きる欲求が満たされると、何かに貢献して承認されたいという欲求が出てきます。ということは、最低限の欲求が満たされれば、おのずとやりたいことが出てくる、そしてそれを実現したいと思うのです。シンプルなことです。

賢いはたらき方のススメ ④

—迷いが生じることはないでしょうか。

黒佐：信念を持つことが重要だと思います。自分はこれをやりたい、こうありたいという信念があれば、すべての意思決定の最終的な判断軸になる。迷わなくなると思います。

雇用されるのであれば、会社ごとのルールに自分が合っていることが大切です。合わないと感じたら、ほかの選択肢を探ることができるのではないのでしょうか。労働時間が長い、給料が安い、ホワイト企業などという一般的な条件ではなく、自分の基準で判断できれば、理想に近づけると思います。

五反田バレーは自治体と企業とのコミュニケーションのハブになる

—黒佐さんが発起人の一人として設立した「五反田バレー」とはどのようなものですか。

黒佐：2018年に五反田に拠点を構える freee、ココナラ、セーフィー、トレタ、よりそう、そしてマツリカの6社が発起人となって設立したのが「一般社団法人五反田バレー」です。シリコンバレーのような環境づくりをめざしています。



五反田にはスタートアップの会社がたくさんありますが、個人同士のつながりはあっても、会社同士、同じ職種同士のつながりはあまりありませんでした。そんな中、会社同士のつながりを作れば、デメリットをメリットに変えることもでき、さらに大きなメリットが生まれるのではないかと話をしてきたのがきっかけで立ち上げることになりました。会員組織を設けて、勉強会や交流会などを開催しています。

—スタートアップの会社が五反田に集結したメリットはなんでしょうか。

黒佐：五反田は、JR山手線沿線のなかで、渋谷や恵比寿、品川などと比べて家賃が比較的安価なのに、利便性が良いこともあり、資金が少ないベンチャーやスタートアップの企業が多く集まりました。同じようなスタートアップが集まることで、情報交換ができて、経営者にとってはメリットが大きいのです。

マツリカも2016年に恵比寿から移動してきたのですが、その当時から数社あり、徐々に増えてきて現在400社以上は五反田に拠点を置いていると思います。自治体とのやり取りも活発になりました。

賢いはたらき方のススメ ④

—五反田バレーを設立したことで自治体ともコミュニケーションがスムーズになったということでしょうか。

黒佐：そうですね。以前から国や自治体、大企業などもスタートアップに対して支援をしていたと思うのですが、五反田バレーができたことで、自治体と会社とのコミュニケーションのハブになれたのではないかと考えています。

今までは、国や自治体、大企業が何か支援をしたい、一緒に開発したいと考えていても、個社に当たるしかなかった。五反田バレーというハブができたことで、「こういう開発がしたい」と相談があれば、「それなら A 社がこういうことを行っています」というマッチングができます。コミュニケーションのロスがなくなるのです。その土台作りができたのではないかと考えています。

—自治体との連携は、スタートアップにとってどのようなメリットがありますか。

黒佐：行政が動く地域住民も動きます。興味を持ってくれるんですね。それがとても重要です。何か新しいことを実証・実験する時、地域住民の理解を得ることが大前提になります。

シリコンバレーが成功したのはその部分が大きい。新しいサービスを作ると、すぐにそれを実証実験する環境がある、地域住民がそれに興味を持ってくれることで、成長していくことができるんです。日本では福岡県なども良い例となっていますが、そういう環境が今後増えていくことを期待します。

人も制度も自由度を高めて、個人の色を主張できる働き方へ



—これからのベンチャー企業、スタートアップ企業に求められていることはどのようなことだと思いますか。

黒佐：国や予算の規模に比べて、日本のベンチャー企業への資金の投入がまだまだ少ない現状があります。もうひとつ、スタートアップやベンチャーの企業を選ぶ優秀な人材も限られています。例えば、新卒の就職ランキングにスタートアップの会社が入ることがないんですよね。どちらも、まだまだ世間での認知度と理解が足りないのだと思います。

だからこそ、五反田バレーに限らず、ハブが確立して、仕事が回るようにならないとダメです。スタートアップは、何かの課題を解決する、それを一点突破で行くことを使命としています。今まで想像できなかったものが新しくできる、イノベーションを起こせる可能性があるんで、どんどん作っていくべきだと思います。どんどん送り出していければいいですね。

賢いはたらき方のススメ ④

—新たなライフスタイルが求められている中で、働き方はどのように変わっていくと思われますか。

黒佐：信念を持つことが大前提にありますが、信念があれば、基本に立ち返った時に、自分は何ができるのか、何をやりたいたのかわかってくると思います。それを実行していくためには、環境も整っていなければいけないですね。企業として、フルフレックスやリモートワークなど働く環境を問わない、自由度を広げることが必要となっていきます。そうすると、それぞれ個人の色の働き方が生まれてきます。

例えば、新卒採用も一斉に行う必要はないと思います。今は、就活する学生にとって、内定をもらうことがゴールのように感じています。卒業から半年後、1年後に働きだしてもいいんですね。そういう自由度があり、選択しやすくなれば、個人の色の働き方が生まれてくるのではないのでしょうか。

私自身、普段はほぼリモートワークをしています。会社に来るのは週に1度くらい。時には、旅行先で仕事をすることもあります。いわゆる、ワーケーションです。日頃からそういう働き方をしていたので、コロナ禍でもあわてることなく、会社全体としても通常通りの業務ができました。

もちろん職種にもよりますが、働き方が自由であればあるだけ、いざというときの対応能力もあるのかもしれません。

—今回のような外出自粛のなかではチャンスが生まれると思いますか。

黒佐：業種によってということはあると思いますが、現在のテクノロジーで解決できることはたくさんあります。この機会にチャンスを作れる、新たな展開を考える大きなきっかけになると思います。働き方は制限するものではなくて、個人がやりたいように進めていく、自分がやりたいことを使命感を持ってやっていけば、社会貢献につながると思います。

それを浸透させるためにも、行政も含めて社会全体でバックアップできる環境体制を作れるようにしたいですね。



取材後記

黒佐さんは、高校生の頃、早く起業をしたいから大学で4年間も過ごすのはもったいないと、大学には行かないと両親に告げたのだそうだ。その時に、人生で初めて両親に反対されたのだという。反対されたことが面白くて、大学に行くことにしたのだそうだ。しかし、日本国内の大学ではつまらないからと、アメリカに留学した。考え方はどこかひねくれていそうで、シンプル。黒佐さん自身もすべてシンプルな考えなのだと話す。やりたいことが別にできたら、今の状況をスパッと切って次に進むとも話していた。迷わずに自分を信じて進んでいくパワーがまぶしくも感じた。未来は、スタートアップ企業のコミュニケーションがますます盛んになり、面白い開発が次々と出てきそうでとても楽しそうだ。

プロフィール

黒佐英司(くろさ・えいじ)

株式会社マツリカ 代表取締役Co-CEO

ニューヨーク州立大学バッファロー校卒業。大手ハウスメーカーにて個人向けの企画提案、法人・資産家向けの資産活用提案、海外事業開発において企画営業に携わったのち、株式会社ユーザベースの創業期に入社、営業開発チームの立ち上げを担当。営業部門、マーケティング部門および顧客サポート部門の統括責任者を歴任。2015年に株式会社 マツリカ (mazrica,inc.) を共同設立。代表取締役Co-CEOに就任。

株式会社マツリカ

<https://mazrica.com/>

